

『友だちの手紙』

小学5年生 男子児童

この頃のように寒くなると、友だちと小鳥をとりに行ったことを思い出す。大島へ僕が来たので、この間その友だちが手紙を送ってくれたが、やっぱり仲の良い友だちだったから覚えてるかしたら、そのことを書いてあった。まずお君と去年山で鳥をとったのは昨日のようで、はや一年たった。今年はまだお君はいないけど、まさける君やゆたか君といっしょにとったよ、と、そんなことを読むと僕は本当に情なくなつた。けれど、病気だから仕方がないとあきらめた。

大島へ来たのはそんなに悲しいとは思わなければ、大島は山に小鳥がないのでさびしい。それに山があさいから水など出ないし、炭やきなんかもできないので、友だちが手紙をくれるのはうれしいけれど、色んな事も思い出されて悲しくてならない。

『プロミン』

中学二年生 女子生徒

昨日、私が外から帰って見ると、プロミンの治療をしている女の人が、おばちゃんと色々話をしていて。私もこたつにあたって聞いていると、その人はプロミンのおかげで結節の大きな傷が沢山あったのが、今ではあとかたもなくなつたと云って、大変喜んでいて。なるほどビックリするほどよくなっていた。私もどうしてプロミンの希望をしなかつたらうと、残念な気がした。

考えてみると、四^四五^五年前にやっぱりプロミンのような新薬が出来たと云って、その時大部分の人が希望した。私ももう殆んど病気が分らない位よくなっていたが、これ以上によくなって、少しでも早く帰ってお父さんやお母さんに喜んでいただけこうと思ひ、大好きなお茶も飲まず、冷たい氷のような水を飲んでがまんしていた頃だったので、すぐ希望した。そして、それから暫く経つた或日、私は戸棚から飛び降りた拍子に、右の手首を思いきり打つた。するとそこが赤くふくれたが、それがだん^{だん}く^くぶ^ぶつ^つく^くみたいなものになつてしまつた。そのぶ^ぶつ^つく^くはやがて右の脇の少し下側の所にも出て来た。私はすっかり驚いて毎日々々、そればかり気になつた。時々園長先生も見て下さつた。そして、その赤紫色のぶ^ぶつ^つく^くが結節だと云うことを、私はいつとなしに知つた。結節はしだいにふえてくるようだった。二十年の夏頃からは足にも出始めた。

去年、初めてプロミンの噂を聞いた時、私は本当に嬉しいと思つた。しかし、いざ希望すると云う時、やはり思いまどつた。そして結局、もう少し待つて見ることにした。女の人の話を聞いて、残念な気がしたけれど、今更仕方のないこととも思ふ。しかし、プロミンがきくと云うことは何より嬉しいことだ。今度こそ真先に希望することにしよう。

『夕方の海』

中学三年生 男子生徒

波が静かに砂浜にむかつて寄せては返っていく。幾つもの白い泡をのせては返っていく。僕は海を眺めていると家のことが気になり淋しくなつてきた。船が遠くの島の方へ帰っていく。足を踏みしめて歩くと砂がぎ^ぎしくと

鳴る。一人で砂浜をゆつくり歩いていると誰かと遠くで呼んでいるような気がした。振り向いてみると、棧橋の向うで村の子供が大きな声で遊んでいた。家にいる時、おそくまで遊んでいてお母さんに叱られたことを思い出した。

太陽は島山のかげにかくれて、空の雲がまっ赤に燃えている。僕の向いている海も雲が映ってまっ赤だ。矢竹島、女木島、男木島が墨でかいたようだ。遠くの島になるにつれてうすい墨でぼかしたように見える。

松の枝がゆれて、何處かで雀が鳴いているようだ。ザザザザーと波が寄せては返す。非常に静かだ。波の引いていく音に心がひかれていくようだ。何とも言えない気持がする。

あたりは何時の間にか暗くなりかけてきた。小豆島通いの船が波をきって高松の方へ進んでいく。高松にはもう灯が点いたのか、赤い灯、青い灯、黄色な灯がキラキラ光っている。僕はあちこちと眺めまわした。暗い島かげにも小さな灯がついている。漁船の灯かも知れない。海に少し風が出てきた。顔に冷たい風があたって消える。こうして海を眺めていると何かを考える。

高松の方を見ると大島丸が帰ってくるのが見える。今日は少し遅れたのであろう。島と島との間を帰って来る。汽笛が鳴った。

夕方の海は淋しい。